

# 槐

かい

岡井省二創刊

平成15年9月号

平成十五年八月二日発行 第十三巻第九号 通巻第一四七号（毎月一回一日発行）  
平成三年九月十八日第三種郵便物認可



# さぬきの祭

高橋将夫

炎ゆる日の頭回すに音のして  
人いきれ抜けたる後の草いきれ  
雲海に沈んでゆきし鍵の束  
水母からがんがぜまでの深さかな

天地のホメオスタシスかき氷  
遺伝子の二重螺旋よ阿波縮  
くちなはの伸びて五十歩百歩かな

夏霧さぬき四句の中の天狗と歡喜天

三光鳥しようじしようじの声すなり  
天網恢恢てのひらの蛸かな  
始まりも終りもさぬき祭かな

一省二忌一  
丸山分水

対岸へ風がしまつてをきし飛花  
片減りの靴の恙や花じまひ  
豆の花目覚めしザグザ氏の散歩  
青葉冷天のクルスに鳩の糞  
鳶の食<sup>を</sup>しつひに見ざりき鑑真忌  
蟬の子やうつせみいろに暁の空  
死ぬ気などさらさらなかり蠅叩  
沖 膾 箬 袋 て ふ 一 張 羅  
大過なく生きてかなぶんあふのけに  
してやるもさせてあげるも星祭

〔注〕ザグザ氏＝カフカ「変身」の主人公。ある朝、目覚めると……

特別作品

きりぎりす牛の鼻環の金びかり  
不具合は取替へしますいわし雲  
耳澄ましをる憚りのかまどうま  
骨のゆきわたらぬ処秋がすみ  
省二の忌懸想も仏さまの内  
股間に隠すものなし八ツ頭  
月の浜呻きがこゑとなりゐたる  
灯ともせるころのしづもり水の秋  
帚木の微熱きざせる赤ら顔  
漫画家に伯の敬称梅擬

# 槐安集

## 市場基巳

独活の芽の摘まれ確かに誰かゐる  
うら声に鳴く蛞蝓のみたりけり  
梅雨鯉の大食をなし泡なし  
博打鳥鳴けるあたりを仰ぎみる  
浮巢見の眦灼けて来たりけり

## 水野恒彦

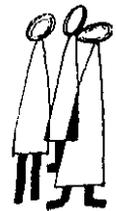
雲の峰音なき音に動くなり  
芥子の花耶蘇のうしろを通りけり  
わたつみの翳りし螢袋かな  
藜まで歩いてゆけば沙鳴く  
病葉やいろを消したる濁り川

## 石脇みはる

くれなゐの海月と海星遊泳す  
風なりに揺れてをりける青瓢  
青葉木菟静かになりし息づかひ  
蟬飛ぶきはに尿かけられし腕かな  
天日や切り揃へある夏木賊

## 竹内悦子

青葉木菟木霊は遠くありにけり  
佳き婆の般若となりし半夏かな  
弁財天に砂をもらふ瓜の花  
マニキュアのいろ濃くなりぬ夏の月  
朱雀門ほどの大きき日雷



木下野生

蟻地獄また雨の降りはじめたる  
づかづかと踏んで通つて蟬の穴  
蛇苺この先は大曲りして  
揺れてをり青葦原のひとところ  
火取虫柱時計の鳴つてをり

中島陽華

兄とあり青梅拾ひ呉れにける  
大地かすかに揺れ偽瓢虫かな  
ご寮人さん夏の小袖を着てゐたる  
菩提樹に触れ三光鳥の声  
薄日射す鴨足草なり  
いのちなが 壽

延広禎一

大瑠璃の声空にあり十牛図  
藻の花や鼓打つ裸婦笛の裸婦  
梅雨満月遊行上戸の影ゆるる  
つやつやと蘭湯を出で酒盗かな  
丹田がでかでか笑ふ初鯉

栗栖恵通子

北天に星の墓ある浮人形  
少年に潮の匂ふ螢籠  
大デコに喜雨のはじめの来たりけり  
星近き島より暮れる青葡萄  
みづかきがプールの淵にかかりをる

# 槐市集

天野きく江

飛行船ふらつとききたる落し文  
夏の野に分け入る四肢でありしかな  
影かげ面おもてに薫風いよよ濃かりけり  
紫蘇揉んで夜の真中へ入りにけり  
百歳の訃にわたつみの夕焼かな

雨村敏子

麦秋の沖や真昼の潮の形り  
地蔵川の上うへの螢多かりし  
結願の青葉闇より人のこゑ  
橋を渡りてほうたるの闇となる  
螢の闇となりけり歎喜天

秋岡朝子

青菽や露天をのぞく童あり  
柳絮とぶ似顔絵描きは色重ね  
椎の花天にブルーの水溜り  
誰待つとなく紫陽花を瓶に活く  
もじずりを屋根に咲かせて水車小屋

岩月優美子

父の日の海を見てゐる紫煙かな  
くつきりと雨後の遠山鱧の皮  
紫陽花の色あつまれば作務衣かな  
明け方の鶏茅の輪くぐりをり  
郭公の一声山の広がりぬ



# 槐集

## 高橋将夫選

南無大師遍正金剛志度詣 枚方 雨村敏子 鯨踏しんたてむ観音おはす大河かな 福岡 楠 翁

空豆を提げて讃岐のひとつとみる 藁筆の墨の省浄天の川

胎蔵界金剛界豆の飯 郭公や阿蘇牛飼の塩袋

茉莉花や金銀砂子金剛杵 与太本を積んで蠅虎はごろうごもばかり

よろこびの夏書きの墨のいるとなる 夏盛ん五黄の寅の漢かな

田の神へ夏のひばりの羽毛降る 降り足りし卯の花腐し歡喜天 宗像 南 一雄

顔ふつくらと六月の菊作り 川上に幽霊くらげ流れをり

草笛やついと真鯉のよつてきし いなびかり玻璃戸へ錠の外れをる

梅 雨 茸 安 倍 晴 明 墓 の 前 くらげ曼陀羅我が骨とほく撒きにけり

羽抜鴨橋の傍へによれば見ゆ 歡喜地やむらさき海胆の棘うごく

愛すまい夏外套の中の裸体 明石 男波弘志 枕辺に人のをはりを藤の花 奈良 瀬川公馨

狂ふまいはんざきに水澄みはじめ 萍のぐるり一族郎党よ

帰すまい鶏を雀りにくる奴ら 木下闌われは紅毛にて候

踊るまい赤い実で爪塗りながら いぬ枇杷のうち捨てられてゐたりけり

やはらかき犀の乳房や唄ふべし 蛇苺あどけないかほ通りけり

# 銀河往来 高橋将夫

## ―俳句とモンタージュ―

映画の理論にモンタージュというのがある。モンタージュは「組み立てること」を意味するフランス語。映画で、別々に撮影されたショットを創造的に接合し、現実とは異なった、新しい時間と空間を作り出すというのがモンタージュ理論である。さまざまな顔のパーツを組み合わせて一つの顔を作るモンタージュ写真を思い浮かべるとわかり易い。俳句における配合（構成）と言ったらもつとよくなるかもしれない。

荒海や佐渡によこたふ天の河 芭蕉

荒海と天の川の配合。誰もがよくわかると言う。ところが、「荒海」と「天の川」のところに入るものによっては、がぜん難解となってくる。このあたり、単純に言えば、季語における「つきすぎ、はなれすぎ」の議論と同様に、数量や、理屈では律せられない。

鯨鳴くゆゑ金箔の海と空 省二

「ゆゑ」で結ばれて、二元的に表現されているものの、本質的には「鯨鳴く」と「金箔の海と空」の配合。「鯨鳴く」も「金箔の海と空」も具象で、それぞれに疑問はないが、配合すると、がぜん難解そうに見える。そのまま、自然体で受け止めればよいのであるが、一つだけ付言しておきたい。「鯨」も「金箔の海と空」も暗喩。何の暗喩かは、改めて解説するまでもなからう。

よろこびの夏書きの墨のいろとなる 雨村 敏子  
すばらしい墨のいろがでた。すてきな慶事があった。いずれにせよ、すばらしいが墨の色で表現されているところがユニークである。書道家の作者なればこそ、この墨のいろ。

田の神へ夏のひばりの羽毛降る 黒田 咲子  
換羽期の練雲雀の羽が田に降った。田の神も夏ひばりの羽毛にころりと参った図。

狂ふまいはんざきに水澄みはじむ 男波 弘志  
あまり思いつめないほうがよい。でも、もう大丈夫だ。水が澄みはじめた。

鯨踏む観音おはす大河かな 楠 翁  
長江に鯨を踏む観音像あり。大河を前に家二軒ならぬ、観音さまである。鯨を踏む由来は知らないけれど、なんだか自分がこらしめられているような気がしてくる。

歓喜地やむらさき海胆の棘うごく 南 一雄  
「いま歓喜地にある」とは、故省二先生の言。この歓喜地に對し、「むらさき海胆の棘うごく」とは、よくぞ言ったと思う。

枕辺に人のをはりを藤の花 瀬川 公馨  
人は枕辺に坐り誕生を祝い、回復を祈り、そして最後を見送る。藤の花は暮春を飾る。(以下略)